

森林研究に伴うヒューマンインパクトの把握とその回復

Grasping the human impact following a forest research and its recovery

*佐山 葉¹、宮地 佑奈¹、辻 有夏¹、高見 紗英¹、小林 柚稀¹、樫田 優人¹、森川 達貴¹、山崎 稜太¹、松木 梨南¹、久保 菜帆子¹

*Yo Sayama¹, Yuna Miyachi¹, Arika Tsuji¹, Sae Takami¹, Yuzuki Kobayashi¹, Yuto Umeda¹, Tatsuki Morikawa¹, Ryota Yamasaki¹, Rina Matsuki¹, Nahoko Kubo¹

1. 京都府立嵯峨野高等学校

1. Kyoto Prefectural Sagano High School

京都府立嵯峨野高等学校の校有林では、5年前から現地調査に基づき、森林環境に関わる研究活動が行われている。そのため道の裸地化と土壌侵食が進んでいる。本研究では、校有林内に設置が簡便で、継続使用可能な登山道を整備し、調査活動の環境に対する影響の変化を評価することを目的とした。そこで、天然素材である礫を用いて、校有林内で3つの区画を設定し、実験を行った。区画に直径3cmから4cmの黒碎石を敷き、普段校有林で調査を行っている高校生がその上を往復した。その後、区画内に残った礫の割合を求めた。区画①の傾斜は4°、区画②の傾斜は27°、区画③の傾斜は16°である。その結果、残った礫の割合は、区画①で93%、区画②で43%、区画③で75%となった。また、実験後、区画②では礫が地面に半ば埋め込まれ、登山道として利用可能であることが示唆された。このことから、傾斜が大きい地点では、礫を地面に半ば埋まるまで均す必要性が示唆された。しかし、礫を運搬するのは非常に重労働で、広範囲に礫道を設置するのは非現実的であると考えられた。今後は、間伐材を併用した敷石について検討する。さらに、ロープを張って人を誘導した。登山経験の多い教員二名から、有効であると確認を得ている。

キーワード：森林、土壌侵食、ヒューマンインパクト

Keywords: Forestry, Soil Erosion, Human Impact